

「根岸線沿線 9 条の会連絡会」

2018 年 07 月 25 日

「根岸線沿線 9 条の会」は、大船駅、本郷台駅、港南台駅、洋光台駅、新杉田駅、磯子駅の近くで活動している 6 つの「9 条の会」が連絡会を作り、「平和憲法を守ろう」の共同の運動をしている。点が線につながり、6 つの会が協働すると、それなりの力を発揮でき、色々な運動を展開することができる。今まで、慶応大学名誉教授の小林節氏の講演会、映画「ザ・思いやり」を上映し、監督のリラン・バクレー氏のスピーチ、同志社大学の浜矩子氏の講演会、また、3,000 万人署名、チラシ配り、リレートークなどをしてきた。

私は牧師を隠退してから、平和憲法、脱原発、沖縄問題などの市民運動に積極的に参加してきた。憲法関連では、9 条を守れと理念的、イデオロギー的に論じる傾向が強いが、生活に密着した視点からの主張が弱いのではないかと、この頃、しきりに思う。防衛という名の下で、膨大な武器の購入がなされている。福祉、年金、医療は顧みられていないのが現状である。また仮に、戦争になった場合の軍事費は計り知れない額になろう。平和が壊れていくことは、国民生活に多大な被害が及ぶことは確実である。9 条を理念だけでなく、経済的な問題から解き明かすことが大切ではないかと思っている。

そういう意味で、東京都知事選に立候補した弁護士宇都宮健児氏の講演を聞きたいと思った。宇都宮氏は社会的弱者の立場に寄り添い、弁護活動をしている。キリスト教の月刊誌『福音と世界』の「リレーエッセイ 聖書とわたし 22」に、宇都宮氏は「聖書を指針として生きる人を知って」と題するエッセイを寄稿していた。韓国民主化時代、6 回も投獄され、教会での礼拝を妨害され、路上礼拝を続けた朴炯圭牧師の『路上の信仰—韓国民主化闘争を闘った一牧師の回想』を読み、下記のように書いている。「新・旧約聖書を貫いて教会はいつも貧しい者、抑圧された者、疎外された者の側にあり、神ご自身、何か偏愛とでも言えるほどいつも彼らに味方されるのは明らかであるからです。」私は、このように聖書を受け止める宇都宮氏に、貧しい者の立場から 9 条をどのように捉えられるのかを聞きたかった。宇都宮氏は快く引き受けてくださった。講演は「広がる貧困・格差をめぐる情勢について～憲法改悪を許さないために」と題して、聴く者に襟を正させる誠実な講演をされた。貧富の格差に苦しむ実態に、公正な税制の確立と富の公平な分配が求められる。改憲をめぐる情勢を話され、民主主義を支える足腰を日頃から鍛えることの重要性を力説された。最後に、韓国の市民運動について、軍事政権と血を流して闘い、民主主義を勝ち取った歴史を持つ韓国に学ぶことは多いと話された。

9 条の会の講演会では、司会者がお決まりの長い挨拶をすることがあるが、終わりの挨拶は簡潔にしようと話し合っていた。ところが、国会で野党が提出した「原発ゼロ法案」などは審議されず、過労死を生み出す「働き方改革」、ギャンブルで儲けようとする破廉恥な「カジノ法」、自民党に利する「議員定数増法」などが強行採決された。政府提出案を追認するだけの空虚な国会運営に対して怒りが起こり、急遽、各 9 条の会からのアピールをしようとする事になった。アピールは支持の拍手を受けた。

講演会后、近く中華料理店で反省会を持った。その時、宇都宮氏は 20 分くらい、自分はクリスチャンでないと言いながら、朴炯圭牧師や釜ヶ崎の本田哲郎神父のことを熱く話された。そして、目先の安倍政権打倒だけでなく、長期的な展望を持って、民主化を育てる教育をしていく地道な努力の必要性を熱弁された。この熱弁に心を打たれた。

時代に対し、怒り、抗議するのは青年の特権ではないかと思うが、現実には高齢者が中心になって運動している。若者を引き込む魅力ある運動になることが求められている。